

「大人」になった「ロリータ」

富田 あゆみ

1. 17年目を迎えたゴシック&ロリータ

「ゴシック&ロリータ」あるいは「ゴスロリ」と呼ばれるファッションが流行となってから、早17年余りが経過した。このファッションが誕生した明確な時期はあいまいであり、元をさかのぼると1970年代から続いていた少女嗜好の強い服装と、パンクやゴスの要素を含んだファッションが、1980年代後半から1990年代にかけてロックバンドのファンの少女たちを中心に融合され徐々に形作られていったと言われている。2000年代になると、メディアで良くも悪くも「ゴスロリ」という言葉が取り上げられる機会が増え、2004年に公開された深田恭子と土屋アンナが主演の映画『下妻物語』によって、「ロリータ」は広く世間に認知されることとなった。その後、「ゴシック&ロリータ」は日本の「カワイイ」ポップカルチャーの一つとして扱われるようになり、日本のみならず海外にも熱烈なファンを増やし続けている。本稿では「ゴシック&ロリータ」に特化した雑誌、『Gothic&Lolita Bible』の創刊号がバウハウスから出版された2000年を一つの節目とする。

その2000年と現在の「ゴシック&ロリータ」を比較してみると、ファッションの外見的な特徴は当時から受け継がれたものが、より華美に、より多彩なデザインにバージョンアップしたという印象である。装飾や、プリントの柄の種類が豊富になり、黒か白か赤か花柄しかなかったような頃と比較すると、見違えるような進化である。また、ダークで退廃的、闇や血をイメージした「ゴシック」はほとんど淘汰され、ブランドは縮小したり消えていった。

例えば、2001年に設立された株式会社ピースナウは、ゴスロリ系のブランド「BLACK PEACE NOW」やパンク系の「PEACE NOW」、メンズ向けの「PEACE NOW for Men」などを展開していたが2013年に倒産。1999年にMALICE MIZERのManaのプロデュースで設立された「Moi-même-Moitié」（モワ・メーム・モワティエ）は、一時は東京や名古屋、広島に直営店を構えていたが2017年現在はセレクトショップとネット通販のみで販売されている。また、2000年に誕生した「h. NAOTO」はゴシックとパンクの要素を中心に多くのカテゴリーを作り出し、芸能人の衣装提供にも積極的で、かなり存在感の強いブランドだったが、2016年7月に全店舗閉鎖に追い込まれ、ネット通販のみの取り扱いに縮小された。『Gothic&Lolita Bible』の誌面からもゴシックの要素は薄くなり、ゴシック愛好家たちはナイトクラブやイベントで独自の発展の道を進んでいる。

その一方で、明るくロマンチックな「ロリータ」が勢力を増していき、国内外で新しいブランドが次々と誕生している。ひとときわ豪華で繊細なデザインで人気の高い「Angelic Pretty」や「BABY, THE STARS SHINE BRIGHT」は、日本全国はもちろん、パリやサンフランシスコにも直営店を構えている。近年は各ブランドがプリントのデザインに凝るようになり、ロリータファッション全体の流行の回転速度を上げている印象である。人気のシリーズは、予約開始後すぐに完売するため、激しい争奪戦が繰り広げられるのだが、その人気に付け込んで転売屋まで押しかけているのが問題となっている。

では、そのファッションをしている人たちはどうか。2000年に10代の少女だった者は20代から30代の大人の女性になり、子供っぽい服装から卒業して世代交代が行われている、と思いきや17年前からずっと同じスタイルを貫いているケースもある。これは他のファッションではあまり見られない例ではないだろうか。

女性は女子高生から女子大生へ、そしてOLになり、やがて妻になり母になり、それに伴いファッションやライフスタイルが変化し、購読する雑誌も変わっていくというのが一般的な女性と女性ファッション誌の関係だろう。いわゆる赤文字系雑誌なら女子大生の『JJ』（光文社）から『VERY』（光文社）、『STORY』（光文社）といった良妻賢母的なライフコースをたどるだろうし、「一生女の子」であろうとする『Sweet』（宝島社）も、年齢を重ねれば『InRED』（宝島社）や『GLOW』（宝島社）という道標が用意されている。お水系ギャルの『小悪魔 ageha』

(主婦の友社)も、「ギャルでもない!おばさんでもない!アラサーのお姉さん世代のための」『姉 ageha』(主婦の友社)がある。このように、女性ファッション誌は様々な年齢層やライフスタイルの女性に向けて作られているはずなのに、「ゴシック&ロリータ」においては、唯一の月刊誌『KERA』(J International¹)と、季刊の『Gothic&Lolita Bible』(J International)から抜け出さないのである。10代から30代、あるいはもっと上の世代まで同じ雑誌を共有するファッションは、恐らく他にないのではないかと思う。

本来、『KERA』の読者層は10代の中高生が想定されている。それは読者(「ケラ!ッコ」と称している)からのおたよりコーナーや、文化服装学院などの学校の広告が掲載されていることを見れば明らかである。しかし『KERA』のモデルの年齢層は10代から30代で、読者スナップのコーナー、特に地方のショップで撮られたものにも幅広い年齢層の女性が載っている。では、年齢層の違う彼女たちはどのように誌面で共存しているのだろうか。

2. 「大人ロリータ」の誕生

2015年から『KERA』は誌面で「大人ロリータバイブル」という企画を連載している。現在34歳の青木美沙子を中心に、皆方由衣や木村優といった25歳以上のモデルを起用し、「エレガント」を合言葉に、コーディネートやヘアスタイルを提案している。

そもそも、「ロリータ」とは少女性の強調された服装で、外見的な特徴としてフリルやレースが多用されたブラウスや、パニエなどを入れてボリュームを出したスカート、肌の透けない靴下やタイツ、ローヒールでつま先の丸い靴を着用しているといったものが挙げられる。それなのに、「大人ロリータ」。この一見したところ不可解で矛盾したコンセプトについて、『KERA』2015年3月号で「大人ロリータを作る10か条」と次のように説明している。

1. 縦長のシルエットを作り、スリムに見せる
2. パニエは控えめにし、スカート丈は長めをセレクト
3. はりのある生地より、女性らしい柔らかな素材感がベター
4. 生成りやスモーキーカラーなど、シックな色合わせをチョイス
5. 別珍やゴブラン織りなど、高級感のある素材で格上げコーデに
6. ヒールのある靴、シンプルなブーツなどで足下をすっきり見せる
7. ファーのケープや別珍のAラインコートなど、アウターはドレッシーに
8. 限定ものやゴージャス感のあるドレスなどで、差をつける
9. 日常でも着られるよう、カジュアルMIXやドレスダウンができる
10. レースや透け感のある素材で、エレガントさを演出

「ロリータ」の中でも、素材やデザインが子供っぽくならないもの、という印象だが、ゴージャス感なのか、カジュアルMIXなのかここでも矛盾が見られるところから、イメージが難しい。では、実際にどんな服装なのかというと、確かにピンクや赤の柄物といった派手な色味は避けられており、ブラウスは綿素材の真っ白なものより、生成りや黒で透け感のあるものが選ばれている。また、パニエをはかずにワンピースをすっきりと着用していたり、靴はローヒールよりは5センチほどのヒールがあるものが多いという特徴がみられる。メイクや髪型は奇抜さを控えて、自然な色でボリュームを抑え、上品な印象を与えている。

¹ 2016年7月1日から「モール・オブ・ティーヴィー」から社名変更。これまでも複数の出版社から発売されており、時期によって出版社名が異なる。

さらに『KERA』2016年6月号では、「Innocent world」、「metamorphose temps de fille」、「Angelic Pretty」の3ブランドのデザイナーとプレス担当が、「大人ロリータを極めるためのQ&A」に答えている。その中でも「縦のラインを意識して細身に見せる」や「軽やかで透け感のある素材が大人感を演出しやすい」と、上記の10か条に当てはまるポイントが登場していた。彼女たちのインタビューから想像すると理想的な「大人ロリータ」のイメージは、シルエットのボリュームを抑え、特にウエストラインをすっきりと見せ、スカートはひざ丈ほどで脚を出しすぎず、服の素材はディティールにこだわった上質で上品なものを選ぶ、といったところだろうか。しかしなんとなくイメージがつかめたところで、再び「大人ロリータ」のページを見ると、他の「ロリータ」とどこが違うのか、どのあたりが「大人」なのか、「ロリータ」の文化圏内にいる者でさえ、明確に違いを説明するのが難しそうな服装が多い。それは「ロリータファッション」として雑誌に掲載されるブランドが限定されているため、デザインに幅が生まれにくいことや、(感覚的なものだが確実に存在している)「ロリータ」の条件のようなものから離れてしまうと、それは全くの別物になってしまうため、結局「ロリータ」のイメージから出ることはないのである。「ロリータ」に代わる言葉が生まれない限り、新しいスタイルは成立しないのだ。

3. 「オトナアリス」

2016年秋、「オトナ乙女のためのファッションマガジン」と銘打った『ETERNITA』が宝島社から発刊された。ここには、かつて『Gothic&Lolita Bible』の編集長だった鈴木真理子が編集に携わり、同じくかつて『Gothic&Lolita Bible』の表紙のイラストや漫画の連載を、創刊号から手掛けていた三原ミツカズが漫画で参加している。つまり、今は『Gothic&Lolita Bible』から手を引いた者たちが、再結成して「あの頃」の少女たちだった読者に向けて新しく雑誌を作ったような印象だった。雑誌の構成は、各ブランドのカタログ、球体関節人形などのアート写真、読者スナップ、実寸大の型紙付きの手作りコーナー、と『Gothic&Lolita Bible』とほぼ同じである。

表紙を開くと、15年前の『Gothic&Lolita Bible』と同じように、読者に向けたメッセージが書かれている。

「ETERNITA とは・・・

イタリア語で『永遠』の意味。

大人になっても少女性を失わない、可愛いものや服を愛する女性「オトナアリス」のための、ファッション&カルチャー雑誌です。

いつまでも、自分らしくいて欲しい。

そんな気持ちを込めて、読者の皆様にお届けします。」

ちなみに、2001年発売の『Gothic&Lolita Bible』Vol.2の巻頭には、嶽本野ばらによる「GOTHIC&LOLITA GO WORLD」というタイトルの詩が綴られており、その中でこう書かれていた。

ゴシック&ロリータ——それはスタイルではなく宿命。

ゴシック&ロリータ——それは流行ではなく存在理由。

(中略)

これは貴方の戦闘服、夢見る力のない多くの人々と戦う為の。

皆、貴方に大人になることを拒否した現実逃避者の烙印を押す。

でも現実を超えた場所にしか貴方の求める世界はない。

(中略)

もう、現実に生きるのはうんざりなのです。

君は永遠の命を持ち幻想の国の住人として生きるのです。

ゴシック&ロリータ——それは美に殉じる覚悟を持った選ばれし者達。

ゴシック&ロリータ——それは羽根を隠し持つ悪魔と天使の末裔。

2001年当時は、現在よりもずっとゴシック&ロリータに対する風当たりが強く、一時はある事件の影響で、ゴスロリは親を殺傷したり自傷行為をするというような、反社会的なイメージも持たれていた。この嶽本のゴシック&ロリータを神聖化し鼓舞する言葉は、外部との隔たりをますます強いものにしたが、同時に思春期の少女たちに大きな勇気とアイデンティティを与えたことだろう。「大人になることを拒否」したロリータたちは、2016年に「オトナアリス」になった形になる。

『KERA』でいうところの「大人ロリータ」が、『ETERNITA』では「大人になったアリス」の意味で「オトナアリス」と呼ばれている。「アリス」も少女性の象徴であるところから、「ロリータ」と意味はほぼ同じである。しかし、「ロリータ」と銘打たないだけあって、ファッションの幅は「大人ロリータ」よりも少し広い。装飾が控えめで、暗めの色使いの「英国風クラシカルファッション」や「PINK HOUSE」を取り入れたコーディネートは、『KERA』では見られない。しかしおなじみのロリータ系ブランドのカタログページでは、『KERA』や『Gothic&Lolita Bible』のような既存の雑誌の誌面とさほど変わらない印象になる。

ところで、ここまで「大人ロリータ」とか「オトナアリス」と述べてきたが、そもそもこれらが示す「大人」とは、具体的に何歳くらいを指しているのだろうか。『KERA』の「大人ロリータバイブル」のコーナーに登場するモデルは25歳以上が目立つが、『ETERNITA』にはモーニング娘。'16の工藤遥(17歳)やカントリー・ガールズの山木梨沙(19歳)といった10代のアイドルも登場するので、

実際のところは「大人」の正確な年齢は不明である。

また、「大人」なのだから会社勤めをしていたり、結婚をしている想定があるのかというと、そうではない。ロリータファッションのモデルの代表的な存在である青木美沙子が、看護師であるというのはテレビなどでも紹介されて有名だが、『KERA』や『Gothic&Lolita Bible』でその話題が取り上げられることはほとんどない。誌面ではいつもピクニックやお茶会か読書か音楽鑑賞をしている。つまり、「ロリータ」は大人になっても労働や結婚とは無縁の、永遠に少女の世界観の中で生きているのだ。嶽本の言葉で言えば「大人になることを拒否した現実逃避者」が、「永遠の命を持ち幻想の国の住人として生き」ていることになる。歳をとることを忘れたとでもいえそうだ。だから、青木美沙子は外見的に歳を取らず、10代から30代になった現在まで同じ雑誌のモデルとして活躍している。



4. 大人になれないロリータたち

ファッション誌を愛読する層の女性は、ある程度の年齢になるとブランド物のバッグや靴にあこがれを持ち、それを所有することで自分自身を高めるという²。バッグは持つ女性のアイデンティティを表す、「自己啓発ツール」なのだそう。とりわけ HERMES のバーキンは未婚、既婚、専業主婦、キャリアといった立場を問わず女性が欲しがると言われる別格のバッグだそうなのだが、「大人ロリータ」たちの多くは恐らく30代になっても HERMES に憧れない。

² 米澤泉『女子のチカラ』(勁草書房 : 2015, 152)

アクセサリーも、ダイヤモンドとゴールドが輝く繊細なネックレスより、スイーツモチーフのQ-podのネックレスの方が喜ばれるし、雑誌にも掲載される。メイク道具も、ハイセンスでハイクオリティな高級ブランドのものより、安価で見た目の可愛いものが優遇されている印象である。女性ファッション誌なら載っていて当然の下着も、ほとんど見かけない。「大人の女」の象徴が、「ロリータ」の文化からは排除されている。「大人ロリータ」になろうと、「大人」ではない。30代を迎えた「大人ロリータ」たちは、陰ながら年齢と戦っていて、見た目の衰えを全力で食い止めているのかもしれないが、その様子や方法は一切見せない。まるで時を止めたように、少女の世界の中で延々と生きているのだ。例えまわりの同級生が「大人」になっていこうとも、10代の頃と変わらない「ロリータ」のスタイルを貫き続けるのは、「ロリータ」でないと生きていけないという宿命のようにも見える。まさに、2001年に嶽本野ばらがゴシック&ロリータたちに向けて語りかけた

「ゴシック&ロリータ——それはスタイルではなく宿命。

ゴシック&ロリータ——それは流行ではなく存在理由。」

という言葉通りである。

ここで一つ疑問が湧く。もしかすると、「ロリータ」たちは「大人」になる方法がわからずにいるのではないだろうか。もちろん、自らが望んで「幻想の国の住人」として、自分が作り上げた世界観で生きている場合もあるだろう。例えば2001年に『Gothic&Lolita Bible』にモデルとして掲載されていた香奈は、現在も「MOON 香奈」として当時と同じような幼いイメージのまま活動している。ところが現実的な30代、40代になったときのビジョンが、「ロリータ」には与えられていない。

ロリータファッションは、ストリートファッションにしては太く長く続いている。一部の若者の文化、という域をとくに逸脱しているといえる。1990年代、ゴスロリが話題になるより少し前に、同じくストリートファッションから生まれた「コギャル」は、「ガングロ」、さらに「ヤマンバ」「マンバ」という過激な進化を遂げた後、緩やかにブームが落ち着いていった。ギャルファッションの代表ブランドだった「LOVE BOAT」や「ALBA ROSA」は姿を消し、『Happie Nuts』（インフォレスト、ネコパブリッシング）『egg』（大洋図書）といったギャル雑誌は次々と休刊に追い込まれた。しかし現在もギャルのスタイルは継承されているし、過激な「ヤマンバ」スタイルのギャルもいまだに絶滅はしていない。ブームをけん引するメディアが減っても、独自のスタイルを貫き続けている様子は、ゴシック&ロリータと類似しているように見える。しかしゴシック&ロリータとギャルの決定的な違いがある。「ギャル」は世代交代しているし、転身ができる。

例えば、『egg』の休刊号となった2014年7月号には、2000年代にブームを作り出したかつてのガングロモデルたちが、同窓会的に集まったコーナーが掲載されている。アラサーになった彼女たちは、すっかりガングロギャルを抜け出して色白の「美人ライター」やエステティシャン、社長秘書などに転身しており、当時との姿のギャップを見せていた。また、『Cancam』（小学館）のモデルでOLファッションのお手本として人気を博した押切もえも、元々ガングロのコギャルとして『egg』のモデルを務めていた過去がある。

一方「ロリータ」には、このようにお手本になる転身やステップアップの例がほとんどないに等しい。いまだに初代が現役で活躍している。30代を迎える「ロリータ」たちは、今は10年前の服でも着られるかもしれない。しかし10年、20年後は着ているかというとなかなか難しい。他人に左右されず、自らの美意識に従う、というのがゴシック&ロリータの生き方なのだろうが、実は次に何を着たらいいのかわからない、という不安を内に秘めているのではないだろうか。とにかく今好きなブランドの服を着続けていくために、見た目の加齢を少しでも抑えようとしているのが、「大人ロリータ」の現状なのではないだろうか。

ゴシック&ロリータファッションの周辺には、近年新しく「過剰装飾」と呼ばれる、その名の通りに重々しく豪華なドレスやアクセサリーをまとうデコラティブなスタイルや、セレクトショップの「NUDE N' RUDE」が提案する、色気を醸し出すフェティッシュ寄りの「お耽ッチ」（お耽美とビッチを合わせた造語）というスタイ

ルも生まれている。「ゴシック&ロリータ」の文化圏内にいた者たちが「ゴシック」「ロリータ」という名前に囚われることのない、新しいファッションを確立しつつある。また、コルセットを使った「abilletage」(アビエタージュ)、「EXCENTRIQUE」(エクサントリーク)といったブランドや、コルセットを扱うセレクトショップの人气が伸びているところから、子供っぽいラインから大人の女性らしい曲線美にシフトしていく道が開いてきたような印象がある。このあたりに、「ロリータ」たちが「大人」になるヒントがあるように感じる。しかしこれらのスタイルはアンダーグラウンドカルチャーなので、SNS やイベントで積極的に情報を集めないといけない段階であり、まだまだ発展途上である。

5. 最後に

ある日、「理想とするライフスタイルの雑誌を選び、自分のビジョンを作り出さない」という課題が与えられた。私は本屋の雑誌コーナーで途方に暮れた。棚一面に何十冊もファッション雑誌があるのに、一冊として共感できるものがない。『Gothic&Lolita Bible』なら共感できるのではないかとすると、これには服の情報とロリータ文化周辺の少女文化の教養知識しか示されていないので、憧れるようなライフスタイルや人間像はほとんどない。この時、自分にはビジョンを指し示す道標がないのだと気が付いた。しかし、これは自分だけだろうか。2000 年頃から現在までゴシック&ロリータを続けているような人はたくさんいる。では彼、彼女らは今、何を目標にゴシック&ロリータをしているのだろう。『KERA』や『Gothic&Lolita Bible』は、実はもう必要とされていないのではないかと。今は雑誌がなくとも、SNS で常に新しい情報が手に入る。そこで新しい流行のスタイルや、人気のブランドが誕生している。ロリータファッションのモデルたちの多くが SNS で発信しているが、内容は「かわいい」服や私物、食べ物、そして自分の顔ばかりである。滝のように情報が流れ、外的な可愛さ美しさばかりが取り上げられているが、嶽本野ばらのような「ロリータ」としての生き方は誰も教えてくれなくなった。恐らく、嶽本野ばらのことを知らない世代も出てきただろう。この辺りは、実際にゴシック&ロリータたちに話を聞く必要があり、今後の課題とする。「ゴシック&ロリータ」が、イベントや、スタジオなどで撮影される単なる「衣装」になってしまえば、「ゴシック&ロリータ」の軽薄化が進むのではないかと危惧している。この先も文化として継承されていくには、見た目の可愛さだけでなく、アイコンとなる人物や道標を示すメディアが必要な気がしてならない。

【参考文献】

芝崎 こと恵、2009.3、「ゴシック&ロリータのアイコン」としての嶽本野ばら」、『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』(12)、135-152

松浦 桃、2007、『セカイと私とロリータファッション』 青弓社

米澤泉、2015、『女子のチカラ』勁草書房